

幼児をもつ親の役割意識に関する研究

住 田 正 樹¹⁾・中 村 真 弓²⁾・山 瀬 範 子³⁾

A Study of the View of Child-rearing ; Focusing on Parents of Infants

Masaki SUMIDA, Mayumi NAKAMURA, Noriko YAMASE

ABSTRACT

This study aims to examine the view of child-rearing which parents of infants have. In recent year, fathers are requested to participate in child-rearing. But fathers have a little time with their children. What do fathers and mothers who have infants think about child-rearing? We pay attention to their senses of balance between work and child-rearing.

We analyzed the date of questionnaire method which put into practice at Fukuoka and Kumamoto in 2007. The results clarified the following points ;

- (1) Both fathers and mothers consider home discipline and cultivation of aesthetic sentiments as contents of child-rearing. In addition, fathers consider cultivation of sociability and work as contents of child-rearing. Mothers consider looking after their children as contents of child-rearing.
- (2) Both fathers and mothers think each role of child-rearing are different.
- (3) Fathers' senses of balance between work and child-rearing make difference of their child-rearing. But they make no difference of time with children.

Thus it is clear that fathers who have a little time with their children may feel uneasy about child-rearing. And it is clear that we need to reconsider contents of child-rearing.

要 旨

本稿の目的は、幼児期の子どもをもつ親の役割意識に関する意識を明らかにすることにある。近年、男女共同参画の視点から、また、子どもの発達や育児を通しての父親自身の発達への効果から、育児の担い手としての父親の役割が期待されている。しかし、実際には父親が育児に充てる時間が少ないのが現状である。育児の当事者である若い父母は、育児をどのように捉え、仕事と育児のバランスをどのように取り、育児と向き合っているだろうか。

2007年に福岡市および熊本市の幼稚園・保育所にて実施した調査から次のことが明らかとなった。

- (1) 育児行為の内容として、父母ともに基本的な生活習慣の確立、社会的ルールの教授、情操を育むといった内容を挙げていたが、父親・母親の間に違いが見られ、母親が一次的な世話や基本的な生活習慣の自立に向けた育成を育児行為として考えているのに対して、父親では、社会性を身につけるための働きかけや、子どもの養育に必要な経済的基盤を整えることを育児行為と考えていた。また、育児の期間を母親の方がより長く捉える傾向がみられた。
- (2) 父親・母親ともに過半数以上が父親と母親の役割は違うと考えていた。また、仕事と育児のバランスについては、「父親は仕事と育児に等しく関わるべき」であり、「母親は育児を優先すべき」と考えているものが多かった。
- (3) 父親の抱く仕事と育児のバランス意識によって育児行為の内容や育児に付与する意味付け、子どもに対する感情の違いがみられたが、子どもとの接触時間について有意差はみられない。

これらの分析から次の2つの点が指摘できる。第1に、多くの父親が厳しい労働環境の中にあるが、意識の上で育児に関わろうとする思いが高まれば、親役割を果たせない負い目や不足感、不安感を感じることで母親の育児不安と違った形で強まる可能性がある。第2に、父母間で育児行為の内容が異なっており、「父親の育児」や育児の分担に関する議論を行う場合、育児の具体像を明確化していく必要がある。

¹⁾ 放送大学教授 (「心理と教育」コース)

²⁾ 尚絅大学短期大学部講師

³⁾ 四国大学短期大学部助教

I. 問題の所在—父親の育児への期待—

本稿の目的は、幼児期の子どもをもつ親の役割意識に関する意識を明らかにすることにある。

「夫は外で働き、妻は家庭を守る」という性別役割分業の下では、父親とは、経済的基盤を維持するため働く存在であり、母親が家事を担い、また、子どもの世話や教育を行ってきた。子どもを預かるといった育児援助の提供者は、主に祖父母であり、父親の役割は大きくないと報告されてきた(落合, 1989)。しかしながら、1990年代から、この性別役割分業意識が揺らぎ、父親に対してもより幅広い育児への関与が期待されている。

このように父親の育児が求められる背景として、松田(2008)は、育児の支え手のサポートの弱体化、共働き夫婦の増加、母親の育児不安の高まり、少子化対策の4つを挙げている。父親と母親が育児をどのように分担し、家事・育児と職業への男女共同参画をいかに可能にするかが問われているといえる。

さらに、父親の育児が注目される視点として、子どもの発達への影響や父親自身の育児を通しての発達が挙げられよう。先行研究としては、中野(1996)が、3歳児の発達と父親行動の関連を明らかにしている。発達の度合いが高い子どもほど、父親とよく遊ぶ傾向が見られ、また父親が「子の言いなりにならない」、「してはいけないことを教える」といったしつけ行動をしていることが関連していた。また、父親にとっての子育て体験の意味について、牧野(1996)は、おむつ替えやしつけをする、相談相手になる、本を読んであげるといった育児をすることが、父親の「親としての自覚」や「人間としての成熟」にプラスの効果を与えることを明らかにしている。つまり、分業論の視点からだけでなく、発達論の視点からも、育児の担い手として父親への期待が高まっているのである。

さて、このような意識の変化を受け、船橋(1999)は、父親・母親を問わず、親というものの子どもに対する基本的な役割とは、①子どもの成長に必要な経済的資源を供給する「扶養」(provider)、②子どもの社会規範の学習や価値観・行動様式の確立を支援する「社会化」(socialize)、③子どもが出来ないことを援助する「世話」(career)だとしている。このように、父母の区別なく親という枠組みで捉えた時、育児^(註1)という営みは、従来の直接子どもに関わる行為(世話、社会化)だけでなく、子どもの成長・発達の基盤を支える行為(扶養)までを含めることになる。この船橋の説に倣えば、性別役割分業の下では、父親は「扶養」を担い、母親が「世話」や「社会化」を中心に担ってきたが、現在は、父親に対して、「扶養」のみならず、「世話」・「社会化」役割を果たすことが求められていると捉えることができる。

しかし、実際には、厚生労働省の平成20年雇用均等基本調査によると、育児休業を取得した男性の割合は

1.23%と、女性の90.6%と比べると、男女間で大きな格差があり、育児時間についても、父親が育児に充てる時間が少ないのが現状である。

このような現状において、育児の当事者である若い父親・母親たちは、育児をどのようなものだと捉え、かつ仕事と育児のバランスをいかに取り、育児と向き合っているだろうか。本稿では、育児に関する意識の上で、親たちの役割意識に、どのような変化が起きているのか、また、それが育児行為や感情にどのように反映されているのかについての分析を試みることにする。

II. 調査の概要と対象者の基本的属性

本稿において取り扱うデータは、幼稚園・保育所を利用する保護者を対象にした質問紙調査で得られたものである。2007年10月から12月にかけて、福岡市及び熊本市内の4幼稚園と3保育所の協力を得て、そこに通う3～6歳の幼児をもつ父親及び母親を対象に実施した。調査方法は、園のクラス担任から、園児に調査票を配布して、父親及び母親に記入させる留置法を採用した。きょうだいで通園する場合は、長子に配布するようにし、各世帯1部の回答を得るようにした。1001組の配布に対し有効回収票数は607組であり、回収率は60.6%である。

次に、調査対象者の基本的属性についてであるが、父親・母親の年齢(表1)は、ともに30歳代が多い(35～39歳は40.2%、30～34歳は26.2%)。また、各家庭の子ども的人数については、父親・母親の年齢が比較的高いためか、複数の子どもがいる家庭が8割を超えていた。しかし、第1子の年齢を見てみると、第1子が就学前の家庭が5割を超えており、親としての経

表1 父親・母親の年齢 (%)

	父親	母親	全体
20～24才	—	0.3(2)	0.2(2)
25～29才	4.6(24)	7.3(44)	6.0(68)
30～34才	20.7(109)	31.1(187)	26.2(296)
35～39才	40.1(211)	40.4(243)	40.2(454)
40～44才	25.3(133)	17.8(107)	21.3(240)
45～49才	7.8(41)	3.2(19)	5.3(60)
50才以上	1.5(8)	—	0.7(8)

(無回答・不明は除く。カッコ内は実数。以下、同様。)

表2 父親・母親の職業 (%)

	父親	母親	全体
フルタイムの仕事	88.1(460)	10.9(65)	46.9(525)
パートタイムの仕事	0.2(1)	18.1(108)	9.7(109)
自営業	9.8(51)	3.2(19)	6.3(70)
農業・漁業	1.1(6)	1.0(6)	1.1(12)
内職	—	1.0(6)	0.5(6)
主婦	—	65.5(391)	34.9(391)
その他	0.8(4)	0.3(2)	0.5(6)

験年数は浅いことがわかる。職業については(表2)、父親の88.1%がフルタイム勤務、母親の65.5%が専業主婦である。

Ⅲ. 調査結果の分析

(1) 育児の捉え方

①育児期の始まりと終わり

まず、父親及び母親は、育児がいつから始まり、いつ終わると捉えているのであろうか(表1-1)。育児期の始まりは、全体的に見てみると、妊娠が分かってから(44.3%)、出産してから(41.2%)に分かれる。父親については、妊娠が分かってから(41.7%)、出産してから(37.4%)、出産準備以降(12.5%)となっていた。母親については、妊娠が分かってから(46.5%)、出産してから(44.5%)、出産準備以降(5.1%)と答えていた。父親と母親の半数が、出産以前に、すでに「育児が始まっている」と捉えていることがわかる。また、父親と母親を比較すると、父親のなかに出産準備以降と答える者が多く、母親には出産してからという者が多い。母親と違い、身体的な変化がない父親であるが、妻とともに、出産準備を始めた中で、育児の始まりを自覚したのだと思われる。

次に、育児期の終わり(表1-2)については、どうであろうか。選択肢として、生まれてから1年、保育所・幼稚園に入園した頃、小学校に入学した頃、中

学校に入学した頃、その他を挙げた。父親では、中学校に入学した頃(44.1%)、その他(34.8%)であり、母親になると、その他(55.1%)、中学校に入学した頃(31.8%)となっていた。その他の答えとしては、子どもが自立するまで、結婚するまでなどが挙げられた。「育児」が始まる時期はいつだと思えますか、「育児」が終わる時期はいつだと思えますかという設問であったが、育児の終わりを義務教育の終了段階どころか、就職や結婚するまでとしており、育児期間を長く捉える傾向が見られ、とりわけその傾向は母親によく見られた。

では、この出産以前から子の就職・結婚まで続く育児期間において、父親・母親はどのような行為を「育児である」と考えているのだろうか。育児の具体的な行為内容について見ていくことにする。

②父親・母親の考える育児行為

父親及び母親が、育児とは具体的に何をすることだと考えているのだろうか(表1-3)。育児行為としては、世話、扶養、社会化、教育に関する事項を挙げた。世話とは食事の世話等の子どもに出来ないことを行うことであり、扶養とは子どもの成長に必要な経済的資源を供給することであり、社会化とは子どもが思考・行動様式を確立していくのを支援していくことであり、教育とは子どもの興味・関心を広げて能力を引き出すこととした。

全体的に見てみると、「基本的生活習慣を身につけること(66.5%)」、「情操を育むこと(47.9%)」、「社会的ルールを教えること(46.3%)」、「基本的世話を

表1-1 育児が始まる時期 (%)

	父親	母親	全体
妊娠が分かってから	41.7(222)	46.5(280)	44.3(502)
出産準備以降	12.5(66)	5.1(31)	8.6(97)
出産してから	37.4(198)	44.5(268)	41.2(466)
子どもが生まれてから	5.5(29)	3.2(19)	4.2(48)
子どもが自分で動くようになってから	2.1(11)	0.7(4)	1.3(15)
子どもが言葉を話し始めてから	0.4(2)	—	0.2(2)
その他	0.4(2)	—	0.2(2)

***P<.001

表1-2 育児が終わる時期 (%)

	父親	母親	全体
生まれてから1年程度	0.2(1)	—	0.1(1)
保育所・幼稚園に入園した頃	2.7(14)	1.2(7)	1.8(21)
小学校に入った頃	18.2(96)	11.9(71)	14.8(167)
中学校に入った頃	44.1(233)	31.8(190)	37.6(423)
その他	34.8(184)	55.1(329)	45.7(513)

***P<.001

表1-3 父親・母親の考える育児行為 (複数回答) (%)

		父親	母親	全体
世話	基本的世話をすること ***	20.6(108)	38.7(231)	30.2(339)
扶養	経済的基盤を整えること ***	6.3(33)	2.3(14)	4.2(47)
社会化	基本的生活習慣を身につけること **	62.3(327)	70.2(419)	66.5(746)
	社会的ルールを教えること ***	52.0(273)	41.4(247)	46.3(520)
教育	情操を育むこと	50.7(266)	45.4(271)	47.9(537)
	芸術的能力を引き出すこと	1.5(8)	1.0(6)	1.2(14)
	身体的能力を引き出すこと	2.3(12)	1.0(6)	1.6(18)
	知的能力を引き出すこと *	4.8(25)	2.3(14)	3.5(39)
	その他	2.1(11)	2.5(15)	2.3(26)

(***P<.001, **P<.01, *P<.05 以下、同様。)

すること」(30.2%)となっており、育児行為が社会化、教育、世話に及ぶと捉えられている。芸術的・身体的・知的能力を引き出すことを挙げる者はあまり見られなかった。①で述べたように、育児期は20年以上に及ぶと捉えられている。一方、その内容を見ると、基本的生活習慣の確立、社会的ルールの教授、情操を育む、といった内容で、いずれも義務教育終了段階、ほぼ完了していると思われるようなものであった。

父親と母親を比較すると、母親では、育児とは「基本的世話をすること(38.7%)」や「基本的生活習慣を身につけること(70.2%)」であると考えており、父親では「社会的ルールを教えること(52.0%)」や「経済的基盤を整えること(6.3%)」を挙げていた。つまり、父親と母親の挙げる育児行為は異なっており、母親が一次的な世話や、食事や排泄、衣類の着脱といった基本的生活習慣の自立に向けた育成を育児行為として考えているのに対して、父親では、社会性を身につけるための働きかけや、子どもの養育に必要な経済的基盤を整えることを育児行為と考えていた。

③子育ての意味

では、子どもを持ち、子どもを育てることには、どのような意味があると思っているのだろうか(表1-4)。全体的に見ると、子育てとは、「子どもを育てることで、自分が成長する(75.4%)」、「家族の絆を深める(72.1%)」、「次の社会を担う世代をつくる(56.1%)」、「子育てをするのは楽しい(43.1%)」、「自分の生命を伝える(37.5%)」の順になっている。父親及び母親の傾向も同様であるが、父親と母親を比較すると、母親の場合では、「子どもを育てることで、自分が成長する(81.5%)」、「子育てをするのは楽しい(48.6%)」、「家族の絆を深める(75.4%)」といった個人的な意味合いを持つものに対して、父親の場合では、「家の存続のため(12.1%)」、「子どもを持ち育てるのは当然だ(9.6%)」、「自分の志を継いでくれる後継者(7.5%)」、「子どもを持つことで社会的に認められる(2.8%)」といった社会的な意味合いを持つ傾向が見

られ、有為差が認められた。

父親・母親ともに、子どもが「次世代を担う」という意識は持っているものの、子どもを持つことが自己の成長につながる、子どもを育てることは楽しいというように、育児を行う意味を「自分のため」「家族(=自分たち)」に見出す、個人的な傾向が見られた。

④育児をめぐる感情

次に、育児をする中で生じる肯定的・否定的感情について尋ねたところ(表1-5)、日々感じることにについては、全体的には、「子どもの顔を見ると気持ちが安らぐ(99.8%)」、「子どもを育てることは楽しいと思う(98.8%)」、「子育てによって様々な経験ができたと思う(98.5%)」、「子育てによって生活が充実していると思う(96.0%)」、「子どもを育てることで自分も成長したと思う(94.5%)」と肯定的な感情を抱いている者が大多数である。しかし、一方では「子どもを育てるために我慢することがある(92.6%)」という否定的な感情も同程度見られた。また、父親と母親を比較して有意差が見られたのは、母親は、「子育てによって人間関係が広がった(97.2%)」、「子育てによって様々な経験ができたと思う(99.5%)」と肯定的感情を抱きながらも、「子どもを育てるために我慢することがある(95.9%)」、「将来、子どもがうまく育ってくれるか心配になる(80.6%)」、「一人になりたいと思う(78.8%)」、「子どもを育てることに不安を感じる(76.1%)」、「子どもの世話をするのが嫌になる(59.4%)」と否定的な感情を持っており、いずれの項目についても、父親に比して、否定的に感じていた。

先に見たように、父親と母親の考える育児行為は異なっていた。母親は、基本的な世話や基本的生活習慣を身につけさせることを育児行為として考え、実際母親中心で行われているのである。ここに挙げたような否定的な感情は、子どもの世話に追われ、繰り返しの日常のなかに置かれている母親が主に抱くものであって、あくまでも母親の補助的な立場にいる父親では、

表1-4 子育ての意味(複数回答)

(%)

	父親	母親	全体
子どもを育てることで、自分が成長する ***	68.5(363)	81.5(490)	75.4(853)
子育てをするのは楽しい ***	37.0(196)	48.6(292)	43.1(488)
家族の絆を深める **	68.5(363)	75.4(453)	72.1(816)
自分の生命を伝える	36.0(191)	38.8(233)	37.5(424)
自分の志をついでくれる後継者 ***	7.5(40)	3.0(18)	5.1(58)
次の社会を担う世代をつくる	57.7(306)	54.6(328)	56.1(634)
子どもを持つことで社会的に認められる *	2.8(15)	1.2(7)	1.9(22)
子どもを持ち育てるのは当然だ **	9.6(51)	5.0(30)	7.2(81)
老後の面倒をみてもらう	3.0(16)	3.2(19)	3.1(35)
子どもは一家の働き手	0.9(5)	0.7(4)	0.8(9)
家の存続のため **	12.1(64)	7.0(42)	9.4(106)
特に意味はない	1.9(10)	0.7(4)	1.2(14)
その他	2.3(12)	3.2(19)	2.7(31)

表1-5 育児をめぐる感情

(%)

		父親	母親	全体
子どもを育てることは楽しいと思うことが	ある	99.4(527)	98.2(591)	98.8(1118)
	ない	0.6(3)	1.8(11)	1.2(14)
子どもを育てることで自分も成長したと思うことが	ある	93.2(495)	95.7(577)	94.5(1072)
	ない	6.8(36)	4.3(26)	5.5(62)
子どもの顔を見ると気持ちが安らぐことが	ある	99.8(530)	99.8(602)	99.8(1132)
	ない	0.2(1)	0.2(1)	0.2(2)
子育てによって人間関係が広がったと思うことが ***	ある	80.2(426)	97.2(586)	89.2(1012)
	ない	19.8(105)	2.8(17)	10.8(122)
子育てによって様々な経験ができたと思うことが ***	ある	97.4(517)	99.5(600)	98.5(1117)
	ない	2.6(14)	0.5(3)	1.5(17)
子育てによって生活が充実していると思うことが	ある	96.2(511)	95.8(577)	96.0(1088)
	ない	3.8(20)	4.2(25)	4.0(45)
子どもを育てるために我慢することが ***	ある	88.9(472)	95.9(578)	92.6(1050)
	ない	11.1(59)	4.1(25)	7.4(84)
子どもを育てることに不安を感じることに ***	ある	58.9(313)	76.1(458)	68.0(771)
	ない	41.1(218)	23.9(144)	32.0(362)
子どもの世話をするのが嫌になることが ***	ある	47.1(250)	59.4(358)	53.6(608)
	ない	52.9(281)	40.6(245)	46.4(526)
一人になりたいと思うことが ***	ある	63.5(337)	78.8(475)	71.6(812)
	ない	36.5(194)	21.2(128)	28.4(322)
将来、子どもがうまく育つか心配になることが ***	ある	70.6(375)	80.6(485)	75.9(860)
	ない	29.4(156)	19.4(117)	24.1(273)

否定的に感じる割合は低くなっているのであろう。

(2) 父親・母親の役割

①父親と母親の役割について

次に、3～4歳くらいの子ども、つまり幼児期の子どもを育てていくなかで、父親と母親の役割が同じであるか否かについての設問(表2-1)に対しては、約8割の者が、それぞれの役割が違うと(「どちらかといえば違う・46.9%」+「違う・30.5%」)しており、父親及び母親でも同様の傾向であった。先の(1)②でも述べたように、父親と母親が育児行為であると意識している行為に差が見られたが、今日の親たちであっても、父親・母親それぞれに独自の役割があるとみなしているといえる。

また、仕事と育児のバランスについて尋ねたところ(表2-2・表2-3)、父親であれば、仕事と育児に同じようにかかわるべき(66.8%)であり、母親であ

れば、育児を優先すべき(68.4%)であるという意見が多く見られた。ただし、これについては、父親の場合では、父親であっても仕事と育児を両立したり育児を優先すべきであると、父親と母親が同じように育児にも関わるべきだという考えをもっているのに対して、母親では、父親は仕事を優先するべきだという傾向が高くなっていった。母親の場合になると、父親は仕事と育児に同じように関わるべきだとしているのに対して、母親は育児を優先すべきだとしていた。

表2-1 父親と母親の役割

(%)

	父親	母親	全体
Aに近い	6.4(34)	8.2(49)	7.4(83)
どちらかといえばAに近い	17.2(91)	13.5(81)	15.2(172)
どちらかといえばBに近い	46.0(243)	47.8(287)	49.6(530)
Bに近い	30.4(161)	30.5(183)	30.5(344)

- A. 3～4歳くらいの子どもを育てる場合、父親の役割と母親の役割は同じである。
- B. 3～4歳くらいの子どもを育てる場合、父親の役割と母親の役割は違う。

表2-2 仕事と育児のバランス【父親の場合】 (%)

	仕事>育児	仕事=育児	仕事<育児	合計
父親	24.6(130)	69.0(365)	6.4(34)	100.0(529)
母親	32.7(177)	64.7(351)	2.6(14)	100.0(542)
全体	28.7(307)	66.8(716)	4.5(48)	100.0(1071)

***P<.001

仕事>育児：子どもを育てることより仕事を優先すべきである。
 仕事=育児：子どもを育てることと仕事を同じようにするべきである。

仕事<育児：仕事よりも子どもを育てることを優先すべきである。

表2-3 仕事と育児のバランス【母親の場合】 (%)

	仕事>育児	仕事=育児	仕事<育児	合計
父親	0.9(4)	35.4(165)	63.7(297)	100.0(466)
母親	0.2(1)	27.7(165)	72.1(429)	100.0(595)
全体	0.5(5)	31.1(330)	68.4(726)	100.0(1061)

**P<.01

表2-4 父親の抱く父親・母親の仕事と育児のバランス意識 (%)

		父親の場合		
		仕事>育児	仕事=育児	仕事<育児
母親の場合	仕事>育児	—	0.9(4)	—
	仕事=育児	3.0(14)	31.5(147)	0.9(4)
	仕事<育児	22.5(105)	35.8(167)	5.4(25)

父親は仕事=育児、母親は仕事=育児：平等両立型

父親は仕事=育児、母親は仕事<育児：父親両立志向型

父親は仕事>育児、母親は仕事<育児：性別役割分業型

②仕事と育児のバランス意識のタイプの抽出

—父親の場合—

さて、仕事は父親の生活の多くの部分を占めている。この仕事と子どもと関わることとのバランス意識は、父親の子どもの関わり方に大きな影響を与えると考えられる。そこで、父親の抱いている父親・母親の仕事と育児のバランス意識をクロスして整理した(表2-4)。矢澤らの研究(2003)を参考に、この中から3タイプの意識をもつ父親を抽出した。3タイプとは、①父親も母親も育児と仕事とを同じようにするべきとする「平等両立型」、②父親は同等で、母親は育児優先とする「父親両立志向型」²²⁾、③父親は仕事優先、母親は育児優先とする「性別役割分業型」である。

この父親の仕事と育児のバランスをめぐる3つの意識タイプのいずれかにあてはまる父親は、89.8%であった。最も多かったのは、父親は仕事と育児を同等で、母親は育児優先という「父親両立志向型」(35.8%)であり、次いで、父親も母親も育児と仕事とを同じようにするべきであるという「平等両立型」(31.5%)、父親は仕事優先、母親は育児優先という「性別役割分業型」(22.5%)となっている。タイプ別の特徴的な違いとしては、母親の職業と子どもの人数である。母親がフルタイムの仕事をしている人には、「平等両立型」が多く、子どもが3人いる人には「性別役割分業型」が多く見られる。

以下、このタイプ別により、①父親の考える育児行為、②父親の抱く子育ての意味、③育児をめぐる父親の感情を見ていくことにする。

(3) 3タイプ別の育児をめぐる役割意識

①父親の考える育児行為

次に、この父親の3タイプ別に、父親が、育児とは具体的に何をすることだと考えているのかについて見てみる(表3-1)。3タイプ別で有意差が見られたのは、性別役割分業型には、「基本的世話をすること(30.5%)」や「経済的基盤を整えること(11.4%)」が多く、父親両立志向型は、「情操を育むこと(55.4%)」が多いことである。性別役割分業型は、父親は仕事優先、母親は育児優先という、いわゆる伝統的な役割分業意識が高いタイプであるが、他のタイプと比較すると、育児行為を子どもの世話や扶養であると、より基本的な事柄を挙げており、父親自身が、稼ぎ手としての父親の役割を自覚しているのだと思われる。また、父親両立志向型では、子どもの情操を育てることが多く挙げられたが、これは、子どもの内面性の充実のことである。美しいものや尊いものを見たり聞いたりして、それを表現することは、より高次元の事柄であると思われる。父親も仕事と育児に同じように関わり、母親は育児優先というタイプでは、子どもが豊かな人間として成長することを大事にしていることが窺われる。

②父親の抱く子育ての意味

では、子どもを持ち、子どもを育てることには、どのような意味があると思っているのだろうか(表3-2)。3タイプ別で見えていくと、子育ての意味に違いが見られる。平等両立型では、他の2つのタイプと比較して、「子どもを育てることで、自分が成長する(74.7%)」、「子育てをするのは楽しい(41.1%)」としている。父親と母親で同じように仕事と育児に関わるべきとするこのタイプの父親であるため、子育てには母親と同じ姿勢で取り組んでおり、子育てを通しての自己の成長と共に、子育てをめぐる楽しさや喜びを見出しているのだと思われる。一方、性別役割分業型で見られたのは、「家の存続のため(22.1%)」、「老後の面倒をみてもらう(8.7%)」である。子どもを家の後継ぎ、あるいは老後保障の存在として捉えている。また、「子育てをするのは楽しい」とする者が25.0%にとどまっており、子育てが母親の領分と捉えられていることが窺われる。

だが、興味深いのは、実際の父親と子どもの接触時

表3-1 父親の考える育児行為(複数回答)

(%)

		性別役割分業型	平等両立型	父親両立志向型	全体
世話	基本的世話をすること **	30.5(32)	24.1(34)	15.1(25)	22.1(91)
扶養	経済的基盤を整えること *	11.4(12)	5.7(8)	3.6(6)	6.3(26)
社会化	基本的な生活習慣を身につけること	59.0(62)	67.4(95)	64.5(107)	64.1(264)
	社会的ルールを教えること	51.4(54)	49.6(70)	57.8(96)	53.4(220)
教育	情操を育むこと *	39.0(41)	48.9(69)	55.4(92)	49.0(202)
	芸術的能力を引き出すこと	1.0(1)	1.4(2)	1.8(3)	1.5(6)
	身体的能力を引き出すこと	1.9(2)	2.1(3)	2.4(4)	2.2(9)
	知的能力を引き出すこと	3.8(4)	3.5(5)	6.6(11)	4.9(20)
	その他	1.0(1)	2.1(3)	0.6(1)	1.2(5)

表3-2 父親の抱く子育ての意味（複数回答） (％)

	性別役割分業型	平等両立型	父親両立志向型	全体
子どもを育てることで、自分が成長する *	59.6(62)	74.7(109)	68.9(115)	68.6(286)
子育てをするのは楽しい **	25.0(26)	41.1(60)	40.1(67)	36.7(153)
家族の絆を深める	73.1(76)	63.7(93)	69.5(116)	68.3(285)
自分の生命を伝える	36.5(38)	35.6(52)	35.9(60)	36.0(150)
自分の志をついでくれる後継者	12.5(13)	6.2(9)	7.2(12)	8.2(34)
次の社会を担う世代をつくる	57.7(60)	63.7(93)	57.5(96)	59.7(249)
子どもを持つことで社会的に認められる	3.8(4)	4.8(7)	1.2(2)	3.1(13)
子どもを持ち育てるのは当然だ	11.5(12)	5.5(8)	10.8(18)	9.1(38)
老後の面倒をみてもらう ***	8.7(9)	1.4(2)	2.4(4)	3.6(15)
子どもは一家の働き手	1.0(1)	1.4(2)	0.6(1)	1.0(4)
家の存続のため ***	22.1(23)	8.2(12)	9.0(15)	12.0(50)
特に意味はない	1.9(2)	3.4(5)	0.6(1)	1.9(8)

表3-3 父親と子どもの接触時間【平日の場合】 (％)

	30分以内	2時間以内	2時間以上	合計
性別役割分業型	31.4(33)	40.0(42)	28.6(30)	100.0(105)
平等両立型	27.9(41)	39.4(58)	32.7(48)	100.0(147)
父親両立志向型	31.7(53)	46.7(78)	21.6(36)	100.0(167)
全体	30.3(127)	42.5(178)	27.2(114)	100.0(419)

表3-4 父親と子どもの接触時間【休日の場合】 (％)

	7時間以内	14時間以内	14時間以上	合計
性別役割分業型	35.2(37)	47.7(50)	17.1(18)	100.0(105)
平等両立型	27.2(40)	56.5(83)	16.3(24)	100.0(147)
父親両立志向型	31.7(53)	51.5(86)	16.8(28)	100.0(167)
全体	31.0(130)	52.3(219)	16.7(70)	100.0(419)

間(表3-3、3-4)については、タイプ別の有為な違いは見られないということである。全体として、平日の場合だと、30分程度の接触があるのが30.3%、2時間以内が42.5%となっており、約7割の父親が2時間以内の短時間を子どもと過ごしている。休日になると、14時間以内が52.3%を占めており、幼児期の子どもの睡眠時間が10～11時間程度であることを考えると、子どもが起きている間は、子どもと一緒に過ごしているという構図になっている。

③育児をめぐる父親の感情

次に、育児をするなかで生じる肯定的・否定的感情については、どうであろうか(表3-5)。肯定的感情に関しては6項目、否定的感情に関しては5項目について、「よくある」、「ときどきある」、「ほとんどない」、「全くない」の4件法で回答してもらった。そのうち「よくある」と答えたのは、全体的には、「子どもの顔を見ると気持ちが安らぐ(85.2%)」、「子どもを育てることは楽しいと思う(65.2%)」、「子育てによって生活が充実していると思う(54.5%)」、「子育てによって様々な経験ができたと思う(54.1%)」と肯定的な感情を挙げる者が大多数に上っている。しかしながら、「子どもを育てるために我慢することがあ

る(29.2%)」と約3割の父親が思っていた。3タイプ別で見ると、平等両立型が、最も肯定的感情を抱いており、「子どもを育てることは楽しいと思う(76.0%)」、「子育てによって様々な経験ができた(60.5%)」などとしている。父親両立志向型は、平等両立型に次いで、育児に対して肯定的感情を抱いていた。一方、平等両立型と父親両立志向型には、「子どもを育てることに不安を感じる(平等両立型12.2%、父親両立志向型10.8%)」者や、「将来、子どもがうまく育つか心配になる(父親両立志向型16.8%、平等両立型14.3%)」と感じている人が多く見られた。3タイプ別では、先に見たように、子どもとの接触時間に違いは見られなかった(表3-3、3-4参照)。しかし、平等両立型や父親両立志向型は、父親であっても、仕事と育児に同じように関わらべきだと考えているタイプである。育児に対しても、自らの役割として、向き合っているからこそ、子どもを育てることの楽しさを感じ、様々な経験ができたと思っているのであろう。また、そうした姿勢で臨んでいるからこそ、子育ての不安や、子どもの将来に対する不安も、同時に芽生えてきたのだと思われる。

最後に、仕事も育児にも同じように関わらべきだとする父親達の自由回答の記述には、次のようなものが

表3-5 育児をめぐる父親の感情（「よくある」と回答した者）

（%）

	性別役割分業型	平等両立型	父親両立志向型	全体	
肯定的感情	①子どもを育てることは楽しいと思うことが ***	47.1(49)	76.0(111)	67.1(112)	65.2(272)
	②子どもを育てることで自分も成長したと思うことが **	26.0(27)	47.6(70)	45.5(76)	41.4(173)
	③子どもの顔を見ると気持ちが安らぐことが *	76.0(79)	88.4(130)	88.0(147)	85.2(352)
	④子育てによって人間関係が広がったと思うことが	18.3(19)	25.2(37)	31.1(52)	25.8(108)
	⑤子育てによって様々な経験ができたと思うことが ***	44.2(46)	60.5(89)	54.5(91)	54.1(226)
	⑥子育てによって生活が充実していると思うことが ***	37.5(39)	59.9(88)	60.5(101)	54.5(228)
否定的感情	①子どもを育てるために我慢することが	30.8(32)	27.2(40)	29.9(50)	29.2(122)
	②子どもを育てることに不安を感じる ***	4.8(5)	12.2(18)	10.8(18)	9.8(41)
	③子どもの世話をするのが嫌になることが	4.8(5)	4.1(6)	3.0(5)	3.8(16)
	④一人になりたいと思うことが	18.3(19)	8.2(12)	7.2(12)	10.3(43)
	⑤将来、子どもがうまく育つか心配になることが **	11.5(12)	14.3(21)	16.8(28)	14.6(61)

見られた。

「地域ぐるみで子育てできる社会になって欲しい。子供は大人の行動をよく見ているので、大人が子供の模範になるべきである。マナーの悪い大人が多すぎると思う。」

(40代前半、平等両立型)

「マンション住まいで、周りを見ると、年齢を問わず、大人と子どもの交流がない。大人から、挨拶がないし、もちろん子どもからすることはまれである。こうした基本的な事が全く行われていないのは、学校云々ではなく、社会全体の問題だと思う。時代は変化するのだろうが、日本の昔の良いところがどんどんなくなってきている気がする。子ども達の将来が心配である。」

(40代前半、父親両立志向型)

「子どもがのびのびと遊んでいる姿を見ると、本当に幸せな気分になる。一方で、育児に関する情報や知識が氾濫しており、つらいと感じることがある。親子間の本能的な感覚にしたがって、率直に、時には失敗したりもしながら、育てられれば、もう少し楽なのだと思う。」

(30代前半、父親両立志向型)

育児にも積極的に関わろうとする新しい役割意識をもつ父親たちは、核家族化あるいは情報化社会のなかで、育児情報の取捨選択が難しいことや、子育てを個々の家庭だけではなく、地域や社会全体の問題として捉えていくことの大切さを感じているのであろう。

IV. まとめ

本稿では、幼児をもつ親たちの育児をめぐる役割意識について、主に、父親と母親の比較によって明らかにしてきた。また、父親に関しては仕事と育児のバランス意識の類型化を試みた。

分析の結果は、以下のように要約することができる。

<育児の捉え方>

①育児期の始まりと終わり

父母ともに半数が出産以前から「育児が始まってい

る」と捉えていた。母親では妊娠・出産という母親自身の身体的な変化と育児期の始まりを関連付ける傾向が見られるが、父親では「出産準備」という子どもを迎える準備を行う行為の中に、「育児の始まり」を見出ししている傾向がみられた。育児期の終了としては、就職・結婚するまでといった回答が目立ち、特に母親ほど育児期を長く捉える傾向が見られた。

②育児行為の内容

父母ともに基本的な生活習慣の確立、社会的ルールの教授、情操を育むといった内容を挙げていたが、父親・母親の間で違いが見られ、母親が一次的な世話や基本的な生活習慣の自立に向けた育成を育児行為として考えているのに対して、父親では、社会性を身につけるための働きかけや子どもの養育に必要な経済的基盤を整えることを育児行為と考えていた。

③子育ての意味

「次の社会を担う世代を作る」という社会的価値が多く選択される一方、「子どもを育てることで、自分が成長する」、「子育てをするのは楽しい」、「家族の絆を深める」といった個人的な価値もまた多く選択されていた。

④育児をめぐる感情

父親・母親ともに育児について肯定的に捉えている一方、否定的な感情については、父親よりも母親の方が強く感じていた。

<父親・母親の役割>

①父親と母親の役割について

父親・母親ともに過半数以上が父親と母親の役割は違うと考えていた。また、仕事と育児のバランスについては、「父親は仕事と育児に等しく関わるべき」であり、「母親は育児を優先すべき」と考えている者が多かった。

②父親、母親の仕事と育児のバランス意識

父親の抱く仕事と育児のバランス意識を類型化し、3タイプを析出した。3タイプとは、平等両立型（父親も母親も育児と仕事を同じようにするべき）、父親両立志向型（父親は同等で、母親は育児優先とする）、性別役割分業型（父親は仕事優先、母親は育児優先とする）であり、いずれかにあてはまる人が約9

割である。最も多いのは、父親両立志向型（35.8%）、次いで平等両立型（31.5%）である。

< 3タイプ別の育児をめぐる役割意識 >

①父親の考える育児行為

性別役割分業型の父親は、育児行為として、子どもの世話や扶養であると、より基本的な事柄を考えている。また、父親両立志向型は、情操を育むことを挙げている。

②父親の抱く子育ての意味

平等両立型の父親ほど、子育てを通しての自己の成長と子育ての楽しさを見出している。性別役割分業型では、子どもを家の後継ぎ、あるいは老後保障の存在と捉えている。

③子どもとの接触時間

平日の場合、約7割の父親が2時間以内の接触を持ち、休日の場合だと、約半数が14時間以内を子どもと過ごす。3タイプ別での有為な違いは見られない。

④育児をめぐる父親の感情

平等両立型の父親ほど、最も肯定的感情を抱いており、子どもを育てることの楽しさを感じ、様々な経験ができたと感じている。父親両立志向型が、この平等両立型に次いでいる。また、両タイプには、約1割であるが、子育ての不安や子どもの将来に対する不安を感じている者が見られた。

冒頭で述べたように、昨今、「父親の育児」が求められているが、本稿の基になる調査においても、父親であっても仕事と育児を両立したり、育児を優先すべきだとする父親が7割を超えていた。そして、この仕事と育児に対するバランス意識の違いによって、親としての役割意識は大きく異なっていた。母親一人が担うのではなく、育児に関与しようとする父親の姿が浮き彫りにされたといえる。母親と同じように、育児に向き合い、子どもを育てる楽しさや喜びを感じる一方で、子育ての不安や子どもの将来に対する不安を抱える父親たちである。

しかしながら、30～40代の男性は長時間労働に強いられる社会状況が依然として続いており、実際、意識の上では差があっても、子どもとの接触時間について有為な違いは見られなかった。父親たちの多くがこう

した雇用労働環境の中にある一方、意識の上で育児に関わろうとする思いが高まれば、親としての役割を果たせない負い目や不足感、不安感を感じる可能性がある。母親における育児不安が子どもと関わる中で生じるのに対し、父親の不安感は子どもと関わるできないことに起因することになる。

また、育児として捉えられている行為は、生活習慣の確立やしつけといった内容であり、これらは、幼児期ないしは児童期には達成される課題である。しかしながら、本調査では、育児の終わりを中学生になるまで、またはそれ以降と捉える親たちが多かった。親と子どもの関わる行為すべてが、「育児」と混同されている可能性もある。「父親の育児」、育児の分担という時に、何をもちて育児とするのか、その具体像を明確にする必要もあるだろう。

注

- 1) 新社会学辞典（有斐閣）には、「育児」とは、未熟な状態で生まれた人間の子どもを、保護し養育する営みであり、授乳や食事を与えるなどの子どもの生理的要求を満たす活動とともに、病気や危険からの保護や基本的な生活習慣の育成などの活動が含まれるとある。
- 2) 矢澤ら（2003）の研究では、父親は同等で、母親は育児優先という意識を持つタイプは「二重基準型」と名付けられている。

参考文献

- 船橋恵子, 1999「父親の現在」渡辺秀樹編『変容する家族と子ども』教育出版, 85-105頁
- 牧野暢男, 1996「父親にとっての子育て体験の意味」牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編著『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房, 50-72頁
- 松田茂樹, 2008『何が育児を支えるのか』勁草書房
- 中野由美子, 1996「はじめの3年間の子どもの発達と父子関係」牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編著『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房, 31-49頁
- 落合恵美子, 1989「育児援助と育児ネットワーク」兵庫県家庭問題研究所『家族研究』創刊号, 109-133頁
- 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子, 2003『都市環境と子育て』勁草書房

(2009年11月4日受理)